岡山県古代吉備文化財センター

所報苦備

第68号 令和2年3月〈年2回 3月·9月発行〉

March 2020
Okayama Prefectural Ancient Kibi
Cultural Properties Center

金貌が現れた戦国時代の山城

^{みなみやまじょう} **南山城跡**

倉敷市真備町川辺・船穂町柳井原

小田川合流点付替え事業に伴い、平成29年4月から行ってきた南山明地遺跡、南山明地古墳群、南山城跡の発掘調査は、令和元年10月をもって終了しました。これらの遺跡は、高梁川と小田川が合流するところを見下ろす標高約67mの丘陵上に立地します。発掘調査は丘陵の南斜面で弥生時代中期の集落跡(南山明地遺跡)、尾根の西側で古墳時代の4基ある古墳のうち3基(南山明地2~4号墳)、丘陵東端で戦国時代に築かれた南山城跡を対象に行いました。

なかでも、南山城跡の調査は1年9か月に及び、戦国時代の山城跡をほぼ全体にわたって調査するという、県内はもとより、全国的に見ても数少ない事例となりました。そのため、県内外から広く注目を集め、3度開催した現地説明会には計1,500名を超える方々に参加いただきました。



南山城跡の畝状竪堀群(南西から)

今年度は城の中枢である頂部の曲輪、その南側の腰曲輪、南斜面の畝状竪堀群を調査したことで、昨年度までの調査を合わせると城跡のほぼ全体を発掘したことになり、その全貌が現れました。

調査の結果、南山城跡は約110m四方と小規模ながら、頂部に曲輪2面、その南側に腰曲輪を構え、曲輪には虎口、土塁、横矢を設けたほか、その周りは急勾配の切岸、城域の西端に3条の堀切、北斜面と東斜面に複数の竪堀、傾斜の緩やかな南斜面に21本の竪堀からなる畝状竪堀群を備えていることが分かりました。

また、曲輪を中心に天旨茶碗、青磁、白磁、備前焼の擂鉢、五質土器の鍋・切釜・擂鉢、土前器の皿、石製の硯、瓦、金属製品(銅銭、刀剣の鍔を挟む切羽、小柄、鏃、釘、鉛玉ほか)、漁労用の土製の錘などの様々な遺物が出土しました。これらの多くは16世紀代のもので、その内容や出土量から城内で城兵が一定期間生活していたと考えられます。ただ、城内には掘立柱建物が計6棟しか確認されておらず、その建て替えが認められないことから、城の使用は短期間であったことも想定されます。しかも、戦いに備えて、曲輪、虎口、土塁の周りに配置された計20か所の投石用の石は、その役割を果たすことなく、戦国時代に置かれたままの状態で廃城されたとみられます。

南山城跡の全面的な調査を通じて、城跡の規模や構造だけでなく、綿密に計画された城の設計 (縄張り) と圧倒されるほどの土木量や巧みな技術によって、曲輪の造成、土塁の構築、堀の掘削が行われたことや、築城から使用、廃城に至るまでの変遷を復元する手がかりを得ることができました。

今のところ、南山城に関する史料が明らかでなく、その歴史は不明な点が多いですが、縄張りや発掘調査で確認した遺構・遺物の状況などから、16世紀代に毛利、三村、宇喜多氏などが覇を競った備中国において、この城は地域を守るうえで重要な役割を果たしていたものと考えられます。

(米田克彦)



全貌が現れた南山城跡(南上空から)



土塁の土層断面 (南から)



現地説明会の様子



南山城跡の出土遺物

くわやま 桑山古墳群・桑山南古墳群

平成29年度から行っている一般国道53号(津山南道路)改築に伴う発掘調査は、今年度、桑山1・3・4号墳、桑山南3・5号墳などを対象に実施しました。今回は、前号の桑山4号墳を除いた4基を紹介します。以下の出土人骨の年齢は岡山大学清家章教授の鑑定によるものです。

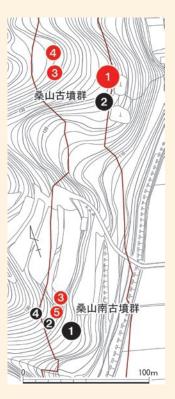
片補式の横穴式石室をもつ桑山1号墳は、6世紀中頃につくられた直径約18mの円墳です。石室の上部は破壊されていましたが、石室床面から須恵器の蓋が、表現の蓋で、投流、鉄製の石突(鉾の装具)、鉄鏃(やじり)、攪乱土から琥珀製棗玉、周溝から円筒埴輪などが見つかっています。

桑山3号墳は直径約10mの円墳で、箱式石棺と木棺が並んで検出されました。先に葬られた箱式石棺からは、多数の玉を連ねた首飾りをもつ幼児の人骨、2振りの鉄刀、約20本の鉄鏃などが出土しています。また、周溝からは円筒埴輪が見つかりました。

桑山南3号墳は直径約10mの円墳で、東に開口する横穴式石室の内部には陶棺2基がおさめられ、鉄釘の出土から木棺も想定されます。7世紀前半につくられ、7世紀中頃まで追葬がなされたようです。

桑山南3号墳の南側で新たに見つかった5号墳は、6世紀中頃につくられた直径約9mの円墳で、中央に竪穴式石室が築かれています。須恵器や鉄鏃、刀子(小刀)のほか、壮年期の人骨が出土しました。

なお、桑山古墳群について11月6・7日に現地説明会を開催し、約170名の参加者がありました。 (尾上元規・小嶋善邦・四田寛人)



調査古墳位置図 (1/3,000、●は今年度対象)



横穴式石室の内部(桑山1号墳)



陶棺出土状況(桑山南3号墳)



幼児埋葬の箱式石棺(桑山3号墳)



現地説明会風景(桑山2号墳)

中世城館跡総合調査

事業最終年度となる本年度は、調査成果をまとめた報告書を作成しました(写真1)。報告書は備前国・備中国・美作国の三分冊からなり、その総頁数は1,600頁を超えました。県下の中世城館跡を悉皆的・総合的に調査した成果をまとめたものとして、これまでになかった報告書といえます。これに加えて、調査成果の概要を紹介したパンフレット『攻略!おかやまの中世城館第六巻(備中国北部・中部編)』を刊行しました。

6年間で実地調査した城館の数は約1,400か所を数えます。このうち所在が不明な城館、あるいは現地での検討の結果、城館とは認めがたいものを除いた約1,100城について報告書に掲載しています。また、今回の調査に際して新たに作成した縄張り図は687城です。

さて、今回の調査成果の一部を各国ごとに振り返っておきましょう。備前国には、室町〜戦国時代にかけて守護代を務めた松田氏・浦上氏の本城があります。写真2の金川城跡(岡山市)は、松田氏の居城として知られます。堀切や井戸などの遺構は松田氏時代のものと思われます。一方、主郭に設けられた連続する虎口や石垣の残欠は、松田氏を滅ぼして入城した字喜多氏や、江戸時代に入ってから備前国に入部した池田氏の改修によるものと思われます。

備中国は南北朝時代の古戦場である福山城跡(総社市)をはじめ、備中国の有力国衆である三村氏と安芸国の戦国大名である毛利氏の間で起こった「備中兵乱」を経て、「備中高松城の戦い」にいたる数々の戦いの舞台となった城があります。写真3の茶臼山城跡(矢掛町)は毛利氏に伝わる史料に、城名と築城の経緯が記された希有な例です。

美作国は、戦国時代に赤松氏と山名氏、三村氏と浦上氏、最後に毛利氏と宇喜多氏との間で断続的に戦端が開かれたため数多くの城館が所在します。写真4の岩屋城跡(津山市)は毛利・宇喜多方の戦いの舞台となった城です。毛利方の籠城する岩屋城の周囲には宇喜多方が築いた土塁と小陣地(陣城)を組み合わせた包囲網が良好に残っています。陣城には、虎口や横堀を駆使した技巧的な縄張りが見られます。

これら調査成果をまとめた報告書は、今後の岡山県の中世城館の包括的な保護と公開活用のための基礎資料となるものです。また、全国的に山城への注目が集まる中で、岡山県の中世城館にも多くの方に興味を持っていただく機会となればと思います。 (和田 剛)



写真 1 報告書



写真 2 金川城跡の調査



写真3 茶臼山城跡の調査



写真4 岩屋城陣城跡の調査

音間川原尾島遺跡出土の骨から読み解く 過去のカエルの分布とヒトとの関係

カエル類は淡水環境に依存して生活する両生類のなかまで、水田や湿地、池などに恵まれた岡山県では13種類(外来種を除く)の分布が知られています。しかしながら、これらの半数以上は、ここ数十年にわたる著しい開発と農業の近代化などによる生息地の喪失や悪化により、絶滅が危惧されています。なかでもナゴヤダルマガエル(Pelophylax porosus brevipodus:種ダルマガエルの一亜種)は、岡山県における集団の消滅が最も危惧されている動物の典型で、現在ではわずかな個体数からなる小さな集団が局所的に残存しているにすぎません。このカエルは、1970年代までは岡山県南部で普通に見られたとされていますが、過去の分布や個体数の変化についての具体的なデータは1990年代以後のものに限られていました。そこでわたしたちは、ナゴヤダルマガエルについてのこうした基礎情報を得ることを目的として、県内の遺跡から知られるカエル遺存体について検討をはじめました。

検討の結果、百間川原尾島遺跡(岡山市中区)の室町時代後期(15世紀おわり頃)の井戸より発見されたおびただしい数(6,564点)のカエルの骨遺存体の中に、ナゴヤダルマガエルと考えられるものが少なくとも14個体分確認されました。これら以外の骨のほとんどは、このカエルと系統的に近縁で、形態やサイズにおいてもよく似たトノサマガエル(P. nigromaculatus)に同定され、少なくとも208個体が検出されました。これらのことは、ナゴヤダルマガエルは当時の岡山平野の沿岸付近の低地に分布していたものの、個体数は決して多くなかった一方、トノサマガエルはこの地域に圧倒的に多く分布していたことを示唆しています。またこれらの骨遺存体のなかには、わずかながら解体痕を伴うものが含まれていました。当時の岡山平野で暮らした人々は、カエルを食料として利用していたか、あるいは祭祀に用いていたのかもしれません。

(岡山理科大学:山根百佳・髙橋亮雄、岡山県古代吉備文化財センター:岡本泰典)



百間川原尾島遺跡の井戸



出土したカエルの骨



ナゴヤダルマガエル (Pelophylax porosus brevipodus) 岡山種族



解体痕を伴うカエルの右脛腓骨

津島やよいまつり

10月13日(日)に、岡山市北区の岡山県総合グラウンドにある津島やよい広場と遺跡&スポーツミュージアムで、津島やよいまつりを開催しました。台風のため前日の土曜日は中止となり、1日のみの開催となりました。

会場では、遺跡や復元建物などの説明のほかに、火起こし、勾玉づくり、石包丁を使った稲穂の収穫・繋すりなどの弥生時代体験コーナーや、弥生人に変身して写真を撮るコーナー及び津島遺跡に関するクイズラリーなども用意しました。

弥生人に変身して写真を撮るコーナーでは、石器や木器のアイテムを昨年よりも増やしました。みなさん、昔の生活を思いうかべながら、独自のポーズで写真を撮っていました。クイズラリーの記念品も新たに作成したオリジナル缶バッジのほか、カラフルな勾玉消しゴムなどを加え充実させました。記念品を身につけて嬉しそうに帰られるお子さんの姿が印象的でした。

令和最初のやよいまつりは1日だけの開催となりましたが、天候ももち直して400名を超える大勢の方に参加いただきました。今回の体験を踏まえ、スマホやコンビニもなかった遠い昔の人々の生活を想像してみていただければ幸いです。 (金田善敬)



弥生人になってみたよ!



石包丁で収穫してみよう

ふるさとの山城探訪

12月7日(土)、山城を巡りながら城の構造や歴史について学ぶ「ふるさとの山城探訪」を開催しました。今回は、出雲街道を見下ろす要衝、標高480mの山頂に築かれた津山市の県史跡岩屋城跡を訪ねました。

岩屋城は、毛利方と宇喜多方が激突した、岡山での戦国時代最後の争乱のあった山城で、美作国でも有数の規模となる城域600mを測ります。その周囲には、岩屋城攻撃のための陣城と土塁を組み合わせた総延長8kmに及ぶ包囲網が築かれています。

29名の参加者は、午前中、麓からの比高差約300mの岩屋城に登り、広い曲輪が連なる様子や深い堀切、長大な畝状竪堀群などをセンター職員の説明を受けながら見学しました。また、午後は、陣城のひとつ荒神ノ上砦跡を訪れて、陣城の構造や尾根上に築かれた土塁などを見学しました。

天候に恵まれた穏やかな一日、参加者のみなさんは山頂からの雄大な眺望に感嘆し、岩屋城を巡る攻防の歴史に思いをはせているようでした。 (髙田恭一郎)



岩屋城から津山市街を望む



荒神ノ上砦跡で説明を受ける参加者

津島遺跡文化財講座「モノづくりの考古学」

センターでは、史跡津島遺跡に関する理解を深めていただくための文化財講座を開催しています。今年度は、「モノづくりの考古学」をテーマに、県立博物館講堂において、全3回の講義を行いました。

第1回 9月28日 (土)「コメの生産」、「石器の製作」

第2回 11月24日(日)「塩の生産」、「鉄器の生産」

第3回 1月25日(土)「土器づくり」、「瓦生産」

各講義とも、主要な道具や食物など古代の生活に密接に関わるモノを取り上げ、その歴史や生産技術について、考古学の視点から解説しました。参加されたみなさんは、当時の人々の知識や工夫の数々に感心した様子で、熱心に耳を傾けていました。 (後藤寛子)



会場の様子

企画展

企画展2「木と共に生きる-吉備のモノづくり-」と題し、令和元年10月9日(水)から令和2年4月12日(日)の期間、1階展示室にて展示を行っています。

「木の文化」と称される日本では、縄文時代から現代まで 多様な気候風土により育まれた、樹種豊かな森林資源が活 用されています。遺跡から出土する木製品の種類が多岐に わたることからも、原始・古代の人々にとって、木は生活 する上で欠かせないものだったことが分かります。

展示では、県内の遺跡から出土した木製品等を通して、木の利用方法や加工技術の歴史を紹介しています。



展示の様子

(松尾佳子)

「おかやま☆遺跡探訪 備中北部と美作西部の遺跡」

センターでは、県内各地の遺跡めぐりに役立ててもらおうと、平成25年から「おかやま☆遺跡探訪」を刊行しています。今年度は6枚目の「備中北部と美作西部の遺跡」です。対象は真庭市・新見市・高梁市の3市で、旧石器時代の遺跡が多い蒜山、飛鳥時代の古墳が集まる北房、近世の藩主の屋敷や墓が往時を伝える高梁、出雲街道沿いに遺跡が所在する勝山・久世・落合、中世の新見庄の面影を色濃く残す新見と、各地の特色に合わせて5つのエリアを設定し、約60か所の遺跡を写真とともに解説しています。また、出土遺物を見学することのできる博物館などの施設も合わせて紹介しています。

県北西部の遺跡探訪に、必携の一枚です。 (團 奈歩)



「おかやま☆遺跡探訪」

ほっ たてばしら

●掘立柱建物が建ち並ぶ弥生のムラ

百間川は、旭川の放水路として江戸時代に造られた人工の河川です。百間川今谷遺跡は、この百間川沿いに広がる遺跡群のひとつで、操山の北麓平野に位置します。東西を旧河道(低位部)に画された幅約400mの微高地上に、西側の百間川兼基遺跡と並んで営まれています。

この遺跡を特色づけるのは、弥生時代中期中頃の掘立柱建物34棟が、東西80m、南北60mの限られた範囲に集中することです。建物は、棟方向を東西ないし南北に揃えるものが多く、平面形は長方形です。中には重複や近接する例があり、すべてが同時存在とは考えられませんが、10数棟のまとまりであったと推定されます。また、建物群の範囲には、その南端を画する東西方向の溝や建物に沿うような南北方向の溝数条、井戸15基と土坑70基が存在します。弥生時代のムラの多くが竪穴住居を中心に構成されるのに対し、掘立柱建物で構成される今谷ムラは一般の人々と

は異なる集団の居住域であった可能性があります。 さて、建物群の柱穴や周囲の溝、土坑からは、炭・焼

さて、建物群の柱穴や周囲の海、土坑からは、灰・焼土・砂粒・炉壁とともに大量の「ガラス滓」が見つかっています。その色調は光沢のある灰色や薄茶色、形状は「しずく」状や「枝・針」状を呈し、あたかも溶けたガラスが糸を引きながら垂れ落ち、冷え固まったようです。化学的な成分分析では、土・砂・植物灰という原料を高温で熱することで生成したもので、同時期のガラス小玉と原料の共通性が指摘されていますが、ガラスそのものであるか、ガラス生産時の屑ながは不らにより、です。ガラス滓は、百間川原尾島遺跡、鹿田遺跡、オラス滓は、百間川原尾島遺跡、鹿田遺跡、カウス滓は、百間川原尾島遺跡、鹿田遺跡、市の特徴的な生産活動を物語る出土品と考えられます。

このように百間川今谷遺跡は、ガラス生産に関わる 高温作業という特殊技術を持つ集団のムラと考えられ、 掘立柱建物が建ち並ぶようすは、一般集落には見られ ない特異な景観だったでしょう。 (高田恭一郎)



掘立柱建物群



ガラス滓



ひろげよう あふれる笑顔と 思いやり

編集・発行 岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻1325-3 TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142 https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/ https://www.facebook.com/okayama.pref.kodai

- 交 通 案 内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分 JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
- ◎ 業 務 時 間 AM8:30~PM5:15
- ◎ 休 業 日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- ◎ 展示室の開館 AM9:00~PM5:00年末・年始を除き、土・日・祝日も

開館しています。 ただし、臨時に休館することがあります。

